

日本は伝説の驚くほど多い国であります。以前はそれをよく覚えていて、話して聴かせようとする人がどの土地にも、五人も十人も有りました。ただ近頃は他に色々の新に考えなければならぬことが始まって、よろこんでこういう話を聴く者が少なくなつた為に、次第に思い出す折が無く、忘れてしまちがえたりして行くのであります。私はそれを惜しむの余り、先ず読書のすきな若い人たちの為に、この本を書いて見ました。伝説はこういうもの、こんな風にして昔から、伝わって居たものということをし、この本を読んで始めて知つたと、言つて来てくれた人も幾人かあります。(中略)

一つの伝説が日本国中、そこにもここにも散らばつて居て、皆自分のところでは本当にあつた事のように思つて居るといふのは、全く不思議な又面白いことで、何かこれには隠れた理由があるのですが、それが実はまだ明かになつて居らぬのです。
はしがき

伝説と昔話とはどう違うか。それに答えるならば、昔話は動物の如く、伝説は植物のようなものであります。昔話は方々を飛びあるくから、どこに行つても同じ姿を見かけることが出来ますが、伝説はある一つの土地に根を生やして、そして常に成長して行くのであります。雀や頬白は皆同じ顔をしていますが、梅や椿は一本々に枝振りが變つてゐるので、見覚えがあります。可愛い昔話の小鳥は、多くは伝説の森、草叢の中で巣立ちますが、同時に香りの高いいろいろの伝説の種子や花粉を、遠くまで運んでゐるのもかれ等であります。自然を愛する人たちは、常にこの二つの種類の昔の、配合と調和とを面白がりますが、学問はこれを二つに分けて、考えて見ようとするのが始めであります。

諸君の村の広場や学校の庭が、今は空地になつて、なんの伝説の花も咲いていないということを、悲しむことは不必要であります。もとはそこにも、さまざまのいい伝えが、茂り栄えていたことがありました。そして同じ日本の一つの島の中であるからには、形は少しづつ違つても、やっばりこれと同じ種類の植物しか、生えていなかつたこともたしかであります。私はその標本のただ二つ三つを、集めて来て諸君に見せるのであります。

植物にはそれを養うて大きく強くする力が、隠れてこの国の土と水と、日の光との中にあるのであります。歴史はちよどこれを利用して、栽培する農業のようなものです。歴史の耕地が整頓して行けば、伝説の野山の狭くなるのも当り前であります。しかも日本の家の数は千五百万、家々の昔は三千年もあつて、まだその片端のほんの少しだけが、

伝説の上では、空也上人よりもなおひろく日本国中をあるき廻って、もつとたくさんの清い泉を、村々の住民のために見つけてやった御大師様という人がありました。大抵の土地ではその御大師様を、高野の弘法大師のことだと思っていました。歴史の弘法大師は三十三の歳に、支那で仏法の修業をして帰って来てから、三十年の間に高野山を開き、むつかしい多くの書物を残し、また京都の人のために大切ないろいろのしごと為事をしていて、そう遠方まで旅行をすることの出来なかった人であります。こういうえらい方だから、亡くなったと見せてほんとうはいつまでも国々を巡って修業していられるのであろうと思っていた人も少くはなかったのです。こんな伝説がひろく行われたのもありません。高野の大師堂では、毎年四月二十一日の御衣おころも替えに、大師堂の御像の衣を替えて見ると、いつもその一年の間に衣の裾が切れ、泥に汚れていました。それが今でも人に知られずこっそりと、この大師がわれわれの村をあるいておられる証拠しんこだなどという人もありました。

とにかくに伝説の弘法大師は、どんな田舎の村にでもよく出かけました。その記念として残っている不思議話は、どれもこれも皆似ていますが、中でも数の多いのは今まで水のなかった土地に、美しくまた豊かな清水を与えて行ったという話でありました。東日本の方は大抵は弘法井、または弘法池などといい、九州ではただ御大師様水と呼んでおります。もとは大師様とばかりいつていたのを、後に大師ならば弘法大師であろうと、思う者が多くなつたのであります。あんまり同じような話がたくさんあって、いくつも並べて見てもつまりませんから、私はただ飛び飛びに今知っている話だけを書いて置きます。皆さんも誰かに聞いて御覧なさい。きつと近くの村にこういういい伝えがあつて、それにはいつでも女が出てきます。その女がほんとうは関の姥様おばさまであつたのであります。

普通は飲み水の十分に得られないような土地に、こういう昔話が数多く伝わっています。人がいつまでも忘れられないよるこびの心を、起さずにはいられなかつたからであろうと思ひます。石川県の能美郡なども、村々に弘法清水があつて、いずれも大師の来られなかつた前の頃の、水の不自由を語っております。例えば栗津村井あわの口の弘法の池は、村の北の端にある共同井戸であります。昔ここにはまだ一つの泉もなかつた頃に、ある老婆が米を洗う水を遠くから汲んで来たところへ、ちやうど大師様が来合せて、喉が乾いたからその水を飲ませよといわれました。大切な水を惜しげもなくこころよくさし上げますと、そんなに水が不自由なら一つ井戸を授けようといつて、旅の杖を地面に突き立てると、忽ちたちそこからいい水が流れ出して、この池になつたといつております。鳥越村の釜清水かまという部落なども、

釜池という清水が村の名になるほど、今では有名なものになっていますが、もとはやはり水がすくなくて、わざわざ手取川まで汲みに行っておりました。土地の旧家の次郎左衛門という人の先祖の婆さまが、親切にその水を大師に進めたお礼に、家の前にこの池をこしらえて下されたのであります。それだから今でも池の岸には大師堂を建て、水の恩を感謝しているということでもあります。花阪という村にもとは良い水がなくて、ある家の老女が遠方から汲んで来たのを、大師様に飲ませました。そうするとまた杖をさして、ここを掘って見よといっで行かれました。それが今日の花坂の弘法池であります。ところがその近くの打越という村では、今でも井戸がなくて毎日河へ水汲みに出かけます。これはまた昔その村の老婆が、大師様が水をほしいといわれた時に、腰巻を洗う水を勧めたその罰だと申します。湊という村にも以前は二つまで弘法大師の清水があつて、今ではその一つは手取川の堤の下になつてしまいましたが、これも大師が杖のさきで、突き出した泉であるといっけておりました。ところがその隣の吉原という村には、そういう結構な井戸がないばかりでなく、今でも吉原の赤脛といつて、村の人が股引をはくと病気になるといひ伝えて、冬も赤い脚を出しているのは、やはりある姥が股引を洗濯して、せっかく水を一ぱいくれといわれた弘法大師に、その洗い水を打ち掛けたからだといっけております。良い姥、悪い姥の話は、まるで花咲爺、または舌切り雀などと同じようではありませんか。(中略)

どうして旅の僧が行く先々に、杖を立ててあるのかということ、私はいろいろに考えて見ましたが、池や泉と関係のないことははぶいて置きます。九州の南の方では性空上人、越後の七不思議の話では親鸞上人、甲州の御嶽の社の近くには日蓮上人などが、竹の杖を立ててそれが成長したことになるのですが、水が湧き出した話には、どうも大師様が多いようであります。東京の附近では入間郡の三つ井という所に、弘法大師が来られた時には、氣立てのやさしい村の女が、機を織っていたさうであります。水がほしいといわれるので、機から下りて遠いところまで汲みに行きました。それは定めて不自由なことであろうと、さつそく杖をさして出るようにして下さつたという清水が、今でも流れて土地の名前にまでなつております。

女が機を織っていたという話も、何か特別のわけがあつて、昔から語っていたことのようにあります。大師の井戸の一番北の方にあるのは、今わかっているものでは山形県の吉川という所で、ここまで伝説の弘法大師は行っておられるのであります。その昔大師が湯殿山を開きに来られた時に、喉が乾いてこの村のある百姓の家にはいって、水を飲ませてくれと申されますと、女房がひどい女で、米の磨ぎ汁を出しました。それを大師はだまつて飲んで行かれたが、あとで女房の顔が馬になってしまった。それからまた二三町も過ぎたところのある家では女房は機を織っていました。ここでも水がほしいといわれますと、いやな顔もせず機から下りて、遠いところまで汲みに行つてくれました。大師は喜んでこの村には良い水がないと見える。一つ掘つてやろうといつて、例の杖をもつて地面に穴をほりますと、こんこんとして清水が湧きました。それが今もある大師の井戸だといふのであります。」

ここでまず最初に、われわれが考えて見なければならぬのは、それがほんとうに弘法大師

